

# Popper Letters

ポパーレター：日本ポパー哲学研究会会報

1989

Vol. 1, No. 1

日本ポパー哲学研究会事務局

(1989年12月号)

## 日本ポパー哲学研究会発足に当たって

碧海純一（放送大学）

去る1989年10月29日に駒場の東京大学教養学部で開催された「日本ポパー哲学研究会世話人会」で、「日本ポパー哲学研究会」が発足した。但し厳密に言うと、本研究会の組織が細部に至るまで決定したわけではない。運営委員（通常の学会でいうと理事）その他の任期や選任方法などについては、1990年6月に予定されている総会で本研究会の組織と運営方法が本格的に決まり、参加者の数も増えるものと期待されている。

は年々増えているが、それを実際に永続きさせて研究の実を挙げていくことは容易ではない。10月の世話人会では、(1)ポパー哲学研究上の協力・交流と普及を目的とした地味な組織とする、(2)本格的な定期刊行物を出すのは財政的に困難と思われるので、ニュース・レター的なものを発行する、(3)若い会員が海外留学をするようなとき、ニュース・レターに掲載された論文が十分に評価されうるように配慮する、などの点で合意が得られた。

世話人会では、偶々私が最年長だったために、運営委員代表に選ばれた。私は粗忽で組織運営には不向きな人間であるが、皆様

「〇〇学会」、「〇〇協会」の名のつく組織

### 内容

1. 日本ポパー哲学研究会発足にあたって----- 碧海純一(放送大学)
2. ポパー哲学の豊かな多面性----- 山脇直司(東京大学)
3. B. J. コールドウエル『実証主義を越えて』-- 堀田一善(慶応義塾大学)
4. 掲示板 -----小河原誠(鹿児島大学) 富塚嘉一(中央大学)
5. 日本ポパー哲学研究会準備会(1989年10月29日) 議事録・会則
6. 『ネットワーク』第一回  
学術情報センターを利用しよう----- 丹沢安治(専修大学)
7. 原稿募集のお知らせ-----事務局

の御力添と御鞭撻によって微力をつくして、本会の発展のために努力したいと念じている。

日本の哲学界では、欧米志向(戦前では特に独逸志向)の傾きが強く、特に海外で流行している学派がブームを起す傾向が強い。ファッションやムードの支配する学界では、重要な哲学者がその業績に相応しい評価を得られないことが多い。その例として、エルンスト・カッシーラー、バートランド・ラッセル、およびカール・ポパーの名を挙げたい。新しいところでは、エルンスト・トープッチュ(1919生まれ)の名を加えてもよいであろう。思想史家、特にカント研究者としてのカッシーラーは、日本でも専門家の間では相当に評価されたが、かれ自身の独創的な思想は余り識られていない。ラッセルは、主に文筆家および平和主義者として紹介され、その論理学および哲学上の遺産はほとんど忘却されている。

ポパーは満87才の今も精力的に仕事を続けているが、その業績はおろか、その名さえも一般読者に広く知られているとは言い難い。いま大流行の「パラダイム」という表現が、ポパーとの論戦においてT・クーンが用いたものであることも知っている人は少ないであろう。カッシーラー、ラッセル、ポパーの共通点の一つを挙げれば、その文体がいずれも流麗明快であり、西洋哲学のオーソドックスな伝統に通じ、英語やドイツ語をマスターした人がこの三碩学の著作を読めば、特に注釈書を必要としないということである。もともと生粋のオーストリア人

であるポパーが、1934年にニュージーランドに亡命して、戦争中骨身を削る思いで書いた「開いた社会とその論敵」を読んでまず驚くことは、その英文が明晰かつ典雅流麗であることだろう。

哲学者が「教祖」になるための一必須条件は、鬼面人を驚かすような晦渋なジャーゴンを濫発して「何ごとのおわしますかは知らねども……」という深い感銘を読者に与え、自分の著作の注釈のための訓詁的・二次的文献の出版を誘発することである。この点では前記の三学者はいずれも失格である。

幸いに、日本にも、ホンモノとニセモノとを識別し、早い時期からポパーの業績を認めてそれぞれの分野で彼の思想に共鳴しつつそれを批判的に活かして来た先覚者がいる。今回、本会の顧問になってくださった山田雄三、安井琢磨(共に理論経済学)、団藤重光(法学)、沢田允茂(哲学)の諸先生がそうである。

ポパーの批判的合理主義は、文字道り、批判的に吟味・攝取すべきものである。本会の任務も、会員がこのような立場からポパーの思想を研究し、かつ、会員相互間においても、和して同ぜず、批判的な立場でそれぞれの学問を展開する場を提供することにあると信ずる。

1989年12月



ポパー哲学の豊かな多面性

山脇直司 (東京大学教養学部)

筆者はいわゆるポパーリアンではない。むしろ、深い共鳴と不満が入り混じった気持ちでポパー思想と付き合っているものである。とはいえ、西独で学位論文 (Die Kontroverse zwischen kritischem Rationalismus und transzendentaler Sprachpragmatik, Hain, 1983) を著して以来、筆者のポパーに対する関心は、衰えるどころか、年々高まっている。特に専門諸科学と哲学とを架橋しうる今日では稀な思想家として、ポパーはまことに貴重な存在に思える。タコツボ化した悪しき学問状況を打開するためにも、我が国でポパーはもっと研究され論議される必要があるだろう。

思うに、これまで我が国でポパーについて創造的研究や活発な論議があまりなされてこなかったのは、学者の間にならかなり通俗的なポパー観が流布しているからではないだろうか。我が国のポパー研究は、まずそうした通俗的なポパー観の誤りを正すことから始めねばならないだろう。私見によれば、我が国で流布している通俗的なポパー観には以下の二つがある。その一つは、科学哲学者としてのポパーを、論理実証主義からクーン流のパラダイム論に至る科学思想上の過渡期に位置づけ、今日では乗り越えられた思想家と裁断する見方である。もう一つは、社会哲学者としてのポパーを、思弁哲学や歴史哲学を全面的に退け、漸進的社会工学を唯一の方法として掲げるいわば近代経済学

流の思想家とみなす見方である。だが、ポパー思想の全体を鑑みるならば、こうした見方はいずれも不十分かつ不当であることがはっきりしよう。

第一のポパー観に関していえば、ポパーの科学思想は、論理実証主義の唱えた検証を反証に置き換えることによって科学と非科学とを境界づけただけの単純なものではなく、論理実証主義はもとより、クーン流のパラダイム論でも片づかない数多くのアクチュアルな問題提起を内包していることが、浮き彫りにされねばならない。例えば、知の創造性、発展、深化、およびそれを追究する理想的科学者像、科学と政治のかかわり方、自然界での人間の位置等々の諸問題は、クーン流のパラダイム論では論じえず、ポパーの科学論が初めて十分に論じうるだろう。

第二のポパー観に関していえば、ポパーの漸進的社会工学は、第二次大戦後の生々しい政治状況の下で、彼独自の倫理観(否定的功利主義)と政治哲学(開かれた社会)とに動機づけられつつ構想されたものであり、その意味で極めて歴史思想的な色彩を帯びていることが強調されなければならない。ポパーの社会科学論は、初めから相関社会科学的であり、ロビンズやサミュエルソン流の純粹経済学とは異質なものである。

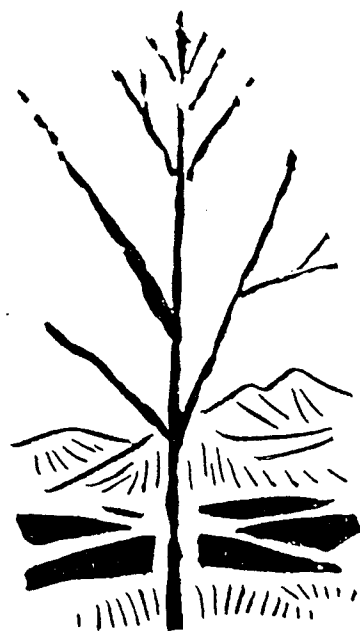
ところで、もしポパー思想の核心の一つが、個別科学者に個別科学を越えた知の包括的展望を認識させる点にあるとすれば、そうした思想は、彼の後期の三世界相互作用論によって確固たる哲学的基盤を得たように思われる。1960年代後半になって、初めて打ち出され、1977年出版の『自己とその頭脳』

において徹底的に展開された彼の三世界相互作用論をどう評価するかは、いわゆるポパーリアンの間でも見解が分かれるほどの微妙な問題である。そして実際、これを無用の長物とみなすポパーリアンすら存在する。だが筆者は逆に、これをポパー思想における大いなる前進とみなしたい。量子力学の主観主義に抗しての实在論、生物学の自然淘汰説に代わる人間レベルでの文化淘汰説、心理学の行動主義や唯物論に代わる心身相互作用論、クワイン流の言語哲学に抗してのK・ビューラー流の言語四機能説、ヒルベルト流の形式的数学に抗しての反駁的証明に基づく問題解決法的数学観等々、これらの学問領域におけるポパー思想は、三世界相互作用論によって初めて十分に理解されうるだろう。また、歴史学での法則主義に代わる状況論理、経済学での新古典派総合に代わる問題解決法的実践の論理、政治学での全体主義・ユートピア主義・自民族中心主義に抗しての個人主義的リベラリズム等々、主に1960年以前にポパーが熱烈に主張した社会科学の論理も、後期の三世界相互作用論によって補強されねばならないように思われる。

更に、心身問題を機軸とする後期ポパー思想は、古代ギリシャ以来のオーソドックスな哲学史と生産的に対話しうるだけの射程と内容とをもつことが指摘されねばならない。『自己とその頭脳』を一読した読者は、経験論や分析哲学の文脈では、全く捉えられないポパーを発見するだろうし、もはや彼を単純に反プラトン主義者と決め付けるわけにもいかななくなるだろう。それどころか筆者は、かれの後期思想を客観的観念論の

伝統に組み入れたい気持すら覚えるのである。

いずれにせよポパー哲学は、学問論的にも思想史的にも豊かで多面的な問題提起に満ちており、彼を批判することさえも、批判者に何らかの収穫をもたらすであろう。その意味でこの度、ポパーの古くからの友人であられる碧海純一先生を始め、鹿児島大学の小河原誠氏、専修大学の丹沢安治氏、秋田大学の立花希一氏らの御尽力によって、会員の自由な相互批判に開かれた日本ポパー哲学研究会が発足の運びとなったのは、時宜を得たまことに慶ばしい出来事である。筆者は、このポパー哲学研究会が、ポパーの内在的研究に留まることなく、ポパーを真に乗り越えるような創造的成果を次々と生み出すことを願ってやまない。



## 新著紹介

B. J. コールドウェル『実証主義を超えて』

堀田 一善（慶応義塾大学商学部）

本書は、Bruce J. Caldwell, *Beyond positivism: Economic Methodology in the Twentieth Century* (London: George Allen & Unwin, 1982, 2nd ed. 1984) の全訳である。

著書のコールドウェル教授は、1974年に米国ヴァージニア州ウィリアム・アンド・メアリー・カレッジを卒業し、1979年にノース・カロライナ大学から学位を取得した後、現在、同大学グリーンズボロ校で経済学を講じている少壮の経済学者である。

コールドウェルの基本的な見地は、理論の評価と批判にとって多くの方法があるのであって、「何らかの単一の絶対に間違いない方法というものはない」、「発見されるのを待っている『最良の方法』などというものはない」という見地である。

こうした見地に立って、彼は方法論的研究の目標について、それを三つのものに絞って検討することから着手する：

(1) すべての方法論的な立場には、どの様にして知識を獲得するのかという問題、つまり、どの様にして所与の現象を最も実り豊かに研究するかという問題に関するユニークな視角が埋め込まれているのであるから、方法論的研究は、その多様な方法論的見解の本質を理解しようとする事。

(2) 20世紀科学哲学の立場から、経済学方法論者によって為される多様な論証の妥当性を評価すること。これが必要な訳は、結局のところ、これ迄、「経済学方法論者の多くが、科学哲学から言葉の言い回し、名

辞、あるいは概念を借用してきているけれども、しばしばそのようなやり方が、さらなる混乱、すなわち経済学者の間で、それらの言い回しや名辞や概念の意味について一致が見られないという状態をもたらしてきたに過ぎなかったからである。

(3) 経済学者の間に現に存在しているであろう幾つかの先入観を揺ぶること。

科学は、今日ほとんど議論の余地のない権威と見做され勝であるが、これは経済学の内部にも浸透しており、何年も前に、「経済学が科学的学科であり得るであろうし、またそうあるように努めるべきであるという理解」が強まって以来のことである。しかも、「20世紀になって、その夢は、科学的方法の厳密性に忠実であろうと欲し、かつ忠実であり得る諸科学に対し、堅固な認識論的基礎を提供するように思われた哲学の教説、つまり実証主義の出現によって実現されたと思われた。」しかし、「多くの変形体を持つ実証主義は、この20年ほどの間に科学哲学の内部で衰退の道を辿ってきた。…そうした理解は、特に『知識の成長派』の出現以降ははっきりしてきているが、経済学者の多くは、依然として経済学は実証主義的学科であり、あるいは実証主義的学科であり得るといふ幻想の下で努力している。」

コールドウェルは、こうした問題を解決するための手順として、(1) ウィーン学団の論理実証主義から現代に至る20世紀科学哲学の主要テーマのいくつかをレビューし、(2) 経済学に見られる実証主義者の時代の主要な方法論的著作のうち、重要な代表的著作をレビューし、そして (3) 第Ⅲ部で

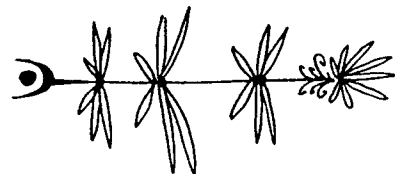
実証主義以降の状況下で、方法論はどんな形式を採るのかという問題と共に、解決案を提示しようとする。

以上の分析を通じて、コールドウェルは、経済学に於いては、今日、実証主義思想を擁護する者も、あるいはそれに敵対する者もあり、特に後者は、クーン、ラカトシュ、ファイヤーベントの著作に見られる科学的知識の歴史的变化の特殊モデルに基づいているが、何れの立場に立つ者も、これまで実証主義思想の成熟形態に十分な注意を払ってこなかったこと、知識の成長派自体が、恐らく衰退してしまった実証主義に対する反応として登場してきていることを看過していると主張する。そして、この点を合わせて考えると、次のように言わなければならないであろうと結論する：つまり、論理経験主義も含めて、実証主義的科学観に基づいて経済科学を構想する時代は終わった；現代の科学哲学者の大部分は、その最も成熟した異形態である論理経験主義も含めて、実証主義が方法論のための実行可能な基礎を提供するということに対して、否定的に対応している、と。本書を『実証主義を超えて』と呼ぶ所以である。

これまで経済科学で猛威を奮ってきた実証主義が、彼の言うように拒絶されるべきであるとすれば、経済科学はそれに代わってどの様な基礎によって構想されるのかということが問題となる。それを扱っているのが第三部「若干の未解決の問題に対する暫定的回答」である。彼は、経済科学の方法論的研究は経済科学の前進にとって有効であるし、必要なものではあるが、それには、此迄の様な認識の論理学の成果ばかり

でなく、科学史や科学の社会学からの知識も必要であること、経済科学における理論選択という問題に対しては、確証主義も反証主義も共に不首尾に終わっていることを認める必要を強調する。

そして、これらの立場が不首尾に終わってきた理由のうち最大の原因は、それらが強い規定性を確立する一元的方法を探究してきたことにあるという。しかし、科学史の成果に見られるように、実際の科学的営みはそのようには動いてはこなかった。かくして、コールドウェルは、クーンやファイヤーベントからは方法多元論を、ファイヤーベントやラカトシュからは「固執の原理」と「増殖の原理」を、そしてポパーからは批判的討論の価値を受け継いで、方法論的主張の論理的帰結および方法論的規則という規定と、知性史の発見成果である記述内容を統合することが必要であり、かつ方法多元論と理論多元論を採用して、経済科学の前進を期待するという折衷的な主張をするのである。そして、この主張を裏打ちしているものが、彼の信念、つまり「理論選択のアルゴリズムといったものはない」とか、「発見されるのを待っている単一の、普遍的に適用可能な最良の方法論、理論評価の方法などというものはない」、また「最適の方法論の探究などというものは無駄であって、手を着けず置いた方がましである」という信念であった。



## 掲示板

・『理想』1989年冬季号の海外哲学展望欄に「ポパーの周辺から、そしてちょっぴり進化論的認識論のゆくえについて」と題して雑文を書いておきました。W.W.バートリーの近況やポパーの新著ならびに全集についても触れました。(1989.11.8.小河原誠)

・W.W.バートリー著『ウィトゲンシュタインと同性愛』の翻訳の第2校ができました。年初には未来社からでると思います。仏訳の序文によると本書はポパー哲学の立場からのウィトゲンシュタイン哲学への挑戦状ということになります。同性愛論争に関しては勝利宣言をしています。ウィトゲンシュタインの同性愛を論じるのがなぜ重要なのか。著者は1985年の「あとがき」で、同性愛をまさにセックスとして論じることがウィトゲンシュタイン哲学の曖昧さと神秘性の解明に通じる次第を明らかにしています。これはまた、ポパー哲学の立場からする作品解釈の基礎理論としても読めると思います。本書はきわものではありません。念のため。(1989.11.8.小河原誠)

・ワトキンスの『ホッブスーその思想体系』(田中浩・高野清弘訳、未来社、1988年)が、井上庄七『近世哲学史論集』(朝日出版社、1989年10月)中の第2部「ホッブス解釈の一方方向」(pp.185-200)で肯定的に取り上げられ、その内容が簡潔に紹介されています。上記ワトキンスの本を読むよりよくわかります。ただし、ほぼ紹介に終わっていて、最後にごくわずか、心身問題に対するワトキンスとポパーの立場の相違が指摘されているのみです。

(1989.11.28.小河原誠)

・会計学におけるエージェンシー理論の展開とその方法論的意義について、論文をまとめてみました(現在、2校の段階です)。社会科学における「理論」の意味について考える素材となればいいのですが(1989.12.18.富塚嘉一)

ポパー哲学準備会開催される(1989.10.29於東大教養学部2号館308号室、出席者16名)

講演「ポパーとの出会い」 碧海純一教授  
(放送大学)

碧海先生は、ポパーとの何度かの出会い、また個人的なエピソードを交えながらお話を進められました。そのなかで、人柄を浮き上がらせるとともに、ローレンツを訪問されてポパーをノーベル文学賞に推すための推薦状に署名を頂いたことなどにも触れられました。また、ポパー哲学の問題点として、世界3、定義、進化論的認識論等々を指摘されました。

## 議事

### 1. 会の名称について

本会は、日本ポパー哲学研究会(The Japan Society for the Study of Popperian Philosophy)と称する。

### 2. 会則について

別掲の通り承認された。

### 3. 通信網について

会員は学術情報センターの電子メール(SIMAIL)及び電子掲示板(BBS)を利用して、新著情報、書評、海外の学会及び研究大会、海外出張、活動報告、会員消息等を伝達するとともに、相互間で質問、討論等を行う。会員は、

原則として、この通信網を利用して機関誌掲載のための論文原稿等を送る。

事務局は、以上の通信を記録し、随時、機関誌、会報等を作成する。

なお、専修大学の丹沢氏より学情の利用法についての詳しい説明があった。(さらに会報で紹介される予定)

#### 4. 機関誌及び会報の形式について

機関誌の名称は、「ポパー哲学研究」とし、運営委員会の委嘱を受けた編集委員が、事務局の協力のもとに編集し、年一回発行する。これは、会員の研究論文等の掲載を主たる目的とする。

会報の名称は、「ポパーレター」とし、事務局が随時発行する。会報は、会員の消息、各種のニュース、会員の活動状況等の伝達を目的とする。

#### 5. 研究会について

年一回開催する。発表及びシンポジウム形式を原則とする。事務局は、発表希望者を随時受け付け、シンポジウム等の企画案を作成し、運営委員会に提案する。

#### 6. 役員及び事務局について

次の通り決定した。

代表：碧海純一氏

運営委員：世話人を中心とする。

事務局：専修大学丹沢研究室(044-991-713

1)(1990年4月より中央大学冨塚研究室0426-74-3592)

事務局員：丹沢安治、立花希一、小河原誠  
冨塚嘉一

編集委員：運営委員が委嘱する。

顧問：山田雄三、安井琢磨、団藤重光、  
沢田允茂

#### 7. 会員名簿について

事務局が作成し、配布する。

#### 8. 会費について

1989年度より徴収する。

#### 9. 第1回研究大会の開催について

場所：東京

日時：6月

シンポジウム・テーマ：ポパー哲学の意義

発表者：未定\*

(\*森博氏、高島弘文氏、浜井修氏にお願いすることになりました。:事務局)

#### 10. ポパーレターについて

準備会の決議事項、電子メール(SIMAIL)及び電子掲示板(BBS)の利用方法等を掲載し、会員獲得を目指して、3月末頃までに発行を予定する。

### 日本ポパー哲学研究会会則

第1条 本会は、日本ポパー哲学研究会(The Japan Society for the Study of Popperian Philosophy)と称する。

第2条 本会はポパー哲学及びその関連分野の研究と発展を目的とする。

第3条 本会は下記の事業を行う。

1. 年次研究会の開催
2. 機関誌及び会報の発行
3. 国内及び国外の同種団体との連絡
4. その他

第4条 入退会は運営委員会の議を経る。

第5条 会員は本会の諸事業に参加し、機関誌、会報、会員名簿等の配布を受けることができる。また、これらを媒体として研究等を発表することができる。

第6条 会員は相互の通信のために学術情報



センターを利用することができる。

第7条 本会には運営委員会を置く。運営委員（若干名）は会員の選挙によって選出する。任期は2年とし、再任を妨げない。運営委員会は下記の事項を決定する。

1. 年次研究会の開催
2. 機関誌編集委員（若干名）の委嘱
3. 事務局の設置及び事務局員（若干名）の委嘱
4. 代表の選出
5. 会員のうちより監事（若干名）の委嘱
6. その他必要な事項

第8条 代表は総会及び運営委員会を招集し、その議長を務める。

第9条 会員総会をもって本会の最高議決機関とする。総会は年1回開催する。ただし、必要ある場合には臨時総会を開くことができる。

第10条 会員は、年会費3000円を所定の期日までに事務局に納入する。

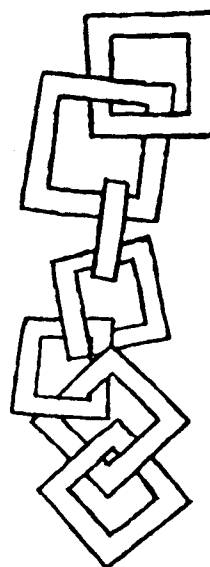
第11条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌3月に終わる。

第12条 本会会則の変更は総会の決議による。

#### 付則

1. 第1回総会までの間、代表、運営委員、事務局員及び事務局については、1989年10月29日の準備会での決定に従う。ただし、必要が生じた場合には、運営委員会の議決を経て諸委員等を変更することができる。
2. 本会則は1989年10月29日より発効する。

以上



# ネットワーク 第一回

学術情報センターを利用しよう

丹沢安治（専修大学経営学部）

10月29日の本研究会準備大会で、会員相互の通信手段として学術情報センター（以下、学情と省略）の提供する電子メールサービスと電子掲示板を積極的に利用しよう、という提案が採択されました。

そこで僅かですが、すでにこれを利用してあるものとして導入的な紹介をしてみます。まず今日のところは電子メール・電子掲示板とはどんなもので、利用するためにはどうしたらよいかといったことを書いてみようと思います。

## 電子メールについて

学情は、昭和55年の学術審議会答申に基づいて設立された国立大学共同利用機関で、国公立の大学・研究所の研究者のためにデータベースのサービスや電子メールのサービスを提供しています。われわれにとっては膨大な学術文献のデータベースの利用も大変有用なものですが、今日は電子メールサービスの利用に重点をおいて説明します。

学情の提供する電子メールサービスとはわれわれが持っているパソコンまたはワープロによって手紙のやりとりができるというものです。これだけでも電話のように発信者と受信者が同時に通信する必要がなかったり、また手紙のように配達に時間を必要とすることがなくなるわけですが、便利な点はこれに限りません。

利用の仕方によっては、論文を共同執筆するために少しづつ修正しあいながら原稿を頻繁にやりとりすることもできるし、また海外のネットワークを通じて海外の研究者と随時意見交換や共同執筆をすることが可能になります。

## 電子掲示板システム

電子掲示板システムとは不特定多数の利用者が共同で利用できるメッセージ交換の場です。メッセージは掲示板に蓄積され、メンバーならば誰でも読むことができるだけでなく、また答えることができます。

そうするとこれは単に通信の場ではありません。例えば誰かがこの掲示板に自分が追いかけているテーマや、疑問に思っている問題を掲示したりすると、それについて多くの人が自分の意見を述べることができ、またさらに別の人がその意見についてのコメントを掲示することができます。掲示板を中心にしてあたかも継続的に研究会を開いているかのように、議論を展開して行くことができる訳です。

このような議論そのものの成果の効用は言うまでもないのですが、さらにわれわれが、全国レベルで問題状況を共有できるということも意義深いのではないのでしょうか。地域的な情報量の偏りをなくすと思われるからです。

また電子メールシステムは海外のネットワークとも接続していますので、もし試みるならば、皆さんがお知り合いの海外の研究者たちにこの掲示板にアクセスしてもらうことにより、日本国内だけでなく、国際的

なレベルで問題状況を共有することができるようになるかも知れません。

利用のためにはどうしたら良いか。

さてこのような電子メールサービスを利用するためには一体どうしたら良いのでしょうか。

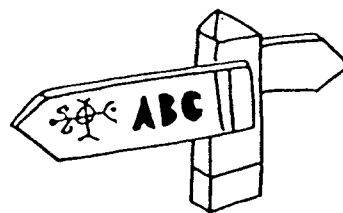
第一に、学術情報センターに利用申請をして利用者番号[ID番号]をもらう必要があります。(地方のかたはさらに自分の所属機関のホストコンピュータにも利用登録をして利用者番号(ID番号)をもらうことをお勧めします。)

第二にさらにパソコンまたは通信機能付きのワープロ、通信モデム、通信ソフトを入手しなければなりません。

まず同封の「学術情報センターシステム利用申請書」に記入、申し込みをして、利用資格を得ましょう。申請すれば、二週間程度で許可がおりると思います。

また東京近辺のかたは直接学情に電話で(つまり公衆回線で)アクセスしてもその電話料金はたいした負担になりません。しかし地方の方は、直接東京にある学情にアクセスすると多額の電話料金がかかります。その場合、大学間コンピュータネットワーク[N1]を利用し、所属機関のホストコンピュータを経由する必要があるでしょう。

これを利用するためには、ご自分の所属する機関のホストコンピュータの利用資格を取っておく必要もあります。もちろん東京在住の方がこのN1を利用しても全くかまいません。どんな場合でも学術情報センターへの利用申請は必要です。



次にパソコンまたはワープロ専用機を端末として入手します。まだなにも持っていらっしゃらない場合、最近のワープロはほとんど通信機能をもっているうえに機能を特化しているので使い易く、もし利用目的が、ワープロ機能/データベースの検索/電子メールに限られるのなら、ワープロ専用機を購入の方が簡便でやりやすいだろうと思います。

私自身は研究室に大学のホストコンピュータの端末として使用できるパソコンをもっているため、情報検索/電子メールのためにはこれで大学間コンピュータネットワークを経由してアクセスしています。しかし日常的なノート作り、手紙、原稿書きのためのワープロとしてはこのパソコンのワープロソフトを用いるよりももっぱら使い勝手の良いワープロ専用機を利用しています。このワープロ専用機(定価18万円程度)にももちろん通信機能は付いており、ワープロ/データベース検索/電子メールの利用を目的とするなら十分なものです。別売りの通信モデムと通信ソフトを購入すれば煩わしい通信パラメータの設定の必要がないのも利点の一つです。初めて利用される方には、こちらのほうがお勧めできると思いま

す。

学情の利用者番号をもらうと同時に「利用の手引」を送って来ます。ワープロ専用機の通信モデムと通信ソフトを購入するときに入手する説明書を見ながらさっそくアクセスしましょう。

学情は国立の機関ですから料金はきわめて低廉ですので、気軽に練習できると思います。そしてたとえ少々苦労したとしても、きっと実り豊かな成果が得られると思います。

次回は実際の利用について記事を書いてみるつもりです。

#### 掲載記事の募集について

論説・報告、新著紹介、掲示板などに掲載する原稿を募集しています。事務局までご投稿下さい。なお活発な議論を喚起するために原稿の審査は行わない方針です。

#### 執筆要項

論説・報告:2400字-2800字程度で問題提起、コンパクトな形にまとめた論証、または内外の論調の紹介を含む。

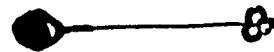
新著紹介:1400字-2800字程度で新たに出版された著作を紹介するもので、翻訳を含みます。

掲示板:会員の情報交換の場です。ゆくゆくは学情の電子掲示板に主役の座を譲りたいと思っています。

200字から300字程度で皆さんが現在追いかけているテーマ、新しく入手した情報、文献

の発見、あるいは質問、経験談、はては噂話まで、なんでも結構ですからお寄せ下さい。

原則として初校のみ校正を著者にお願いします。その他にも、書評、随想的な記事、ノートなど編集上のアイデアもお寄せ下さい。投稿についての問い合わせは事務局(鹿児島大学 小河原誠[Tel:0992-44-5364]、専修大学 丹沢安治[Tel:044-933-9072]、秋田大学 立花希一[Tel:0188-31-1662]、中央大学 富塚嘉一[Tel:03-828-6493])までお願いいたします。



#### 編集後記

★今回は第一号のためノウハウの蓄積と並行して編集を進めなければならなかった。その分、原稿依頼、レイアウト、など一つ一つのステップで少しずつ、出遅れ、迷いがあったようだ。反省している。(丹沢)

★事務局メンバーが互いに遠隔地にいるので、相互の意見調整に限界があたことは否めない。それぞれのメンバーの意見を取り入れることは、結局それぞれのメンバーに事後承諾をもとめる点を残すことになった。独断と偏見をお許し下さい。(丹沢)

ポパー レター(第一号)1989年12月発行

発行人 碧海純一

発行 日本ポパー哲学研究会事務局

(〒214)川崎市多摩区東三田2-1-1

専修大学経営学部 丹沢研究室

☎ 044-911-7131